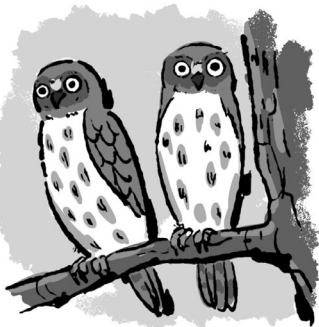


倫理研究所は、九月三日に創立八十周年を迎えます。この間、当研究所が活動してきた目的は「倫理の研究ならびに実践普及により、生活の改善、道義の昂揚、文化の発展を図り、もって民族の繁栄と人類の平和に資すること」です。要約すれば、私たちの使命は「純粹倫理を社会の常識として根づかせること」にあります。

しかしながら、現代社会において「純粹倫理が常識として定着したか」と問われれば、残念ながらそうとは言い切れないのが現実です。では、私たちの常識や倫理観は何によって形づくられているのでしょうか。その大きな要因の一つが「情報」です。

情報は、時代とともに取得手段が変化してきました。かつては書籍や新聞が主な情報源でしたが、昭和二十八年に日本放送協会（NHK）がテレビ放送を開始し、民間では日本テレビ（当時の社長は正力松太郎氏）が続き、映像メディアが主流となりました。その後、インターネットや携帯電話、スマートフォンが登場により、情報の発信者は多様化し、発信の形も一方通行から双方向へと変化しました。

このように、世代や環境によって情報の受け取り方が異なる現代では、常識や倫理観も多様化しやすくなっています。つまり、私たちが「当たり前」と感じingことは、触れてきた情報によって左右されるのです。情報社会が築く「常識」に対して、それを見極める倫理観が必要です。倫理法人会で学ぶ純粹倫理は、情報媒体以上に、今の



苦難という情報が教える 本物の常識から自己を高めよう

自分に本質的に必要な「心の指針」を教えてください。その一つが「苦難」です。

苦難を正しく受け止めるには、純粹倫理を真摯に学び、心のアンテナを整えておくことが求められます。テレビもアンテナとチャネルが合わなければ映らないように、苦難も受け手の準備がなければ、ただの苦しみで終わってしまいます。

その準備とは、「苦難には意味がある」と自覚することです。意味の一つは、心が不自然な方向に向かっていくことを知らせる「赤信号」としての役割です。自分本位で、他者を責める心が芽生えているとき、苦難はその心に警鐘を鳴らします。

また、人は誰しも「今より成長したい」「もっと幸せになりたい」と願います。経営者であれば、会社の発展や社員の幸福を望むでしょう。こうした向上心があるからこそ、人や企業が成長するために、苦難は現れるのです。

倫理研究所の創立者である丸山敏雄は著書『人類の朝光』の中で、「苦難はそのままである」と述べています。情報があふれる現代だからこそ、私たちは苦難を通じて本物の倫理観を育み、間違った情報に流されない心を持つことが求められます。

倫理運動は創始八十年を迎え、これからは百年に向かう新たな時代へと歩みを進めます。SNSなどから得られる情報は便利ですが、それ以上に大切な情報があることを、まだ純粹倫理を知らない方々にも知っていただきたいものです。